



## 「絶命歌」の成立をめぐるって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007158">https://doi.org/10.32150/00007158</a>

# 「絶命歌」の成立をめぐる

—

以前、「六朝『臨終詩』論考」(1)及び「臨終詩の成立とその展開—南北朝から南宋末期まで—」(2)という拙論で、臨終詩の成立とその展開の様相について考えたことがある。そこで最古の作品として取り上げたのは孔融(一五三—二〇八)の「臨終詩」であり、これに先行する、前漢の哀帝に仕えた息夫翦の「絶命辞」なども視野に入れた。

このことと関連して、楊光治編注『歴代絶命詩選析』(百花文芸出版社、一九九六)は、先秦時期から清末に至る、死に臨んで作られたとされる七十六人の「臨終詩」と「絶命詩」を収録している。この書物は「選析」と題しているように、死を目前にしての作品を網羅しているわけではなく、六朝期の仏僧の手になる作品などは収録しない。しかし拙論では取り上げなかった先秦時期の作品として、『詩経』王風・大車と衛侯の女の「絶命歌」(3)の二篇を収録している。この二篇に着目して

みたい。

—

まず、「大車」について見てみよう。この作品が収録されるのは、その第三章が、劉向の『列女伝』巻四、息君夫人の条に引かれていることによるのである。ちなみに第三章は次のように詠じられる。

穀則異室 穀きては則ち室を異にするも

死則同穴 死しては則ち穴はかまを同じうせん

謂予不信 予わを信ならずと謂わば

有如皦日 皦日の如き有り

息国は、今の河南省息県の西南、淮水の北岸にあった小国であり、紀元前六八〇年に楚に滅ぼされた。『列女伝』は次のように言っている。

夫人者、息君之夫人也。楚伐息、破之。虜其君、使守門。将妻其夫人、而納之於宮。楚王出遊、夫人遂出見息君、謂之

後 藤 秋 正

曰、人生要一死而已、何至自苦。妾無須臾而忘君也、終不以身更貳醮。生離於地上、豈如死歸於地下哉。乃作詩曰、……。

息君止之、夫人不聽、遂自殺。息君亦自殺、同日俱死。

夫人は、息君の夫人なり。楚 息を伐ち、之を破る。其の君を虜にして、門を守らしむ。將に其の夫人を妻にして、之を宮に納れんとす。楚王 出遊し、夫人 遂に出でて息君に見え、之に謂いて曰く、人生は一死を要つのみ、何ぞ自ら苦しむに至る。妾 須臾も君を忘るること無きなり、終に身を以て更に醮を貳せず。生きて地上を離るるは、豈に死して地下に帰するに如かんや。乃ち詩を作りて曰く……。息君之を止むるも、夫人 聽かず、遂に自殺す。息君も亦自殺し、同日に俱に死す。

劉向はこれに続けて、「夫義動君子、利動小人、息君夫人不為利動矣。」(夫れ義は君子を動かし、利は小人を動かすも、息君夫人は利の為に動かさず。)と述べているように、息夫人が節義を守ったことから教訓を引き出しているのである。しかし、吉川幸次郎『詩経国風 下』(岩波中国詩人選集二、一九五八)が「大車」について、「おきてにそむいた結婚をしようとする男女が、取締まりの官吏をこわがる歌。朱子は現在の事態とし、古注は、過去にはそうした風儀正しい時代もあったと、追憶する歌とする。」と述べたあと、「なお全く別の説として」と断つて『列女伝』に言及しているように、特定の人物の作品とするには疑問が多い(4)。

### 三

それでは衛侯の女の「絶命歌」はどうであろうか。以下、この歌の成立の事情について探ってみよう。まず、『琴操』卷上(平津館叢書本)の「思婦引」の条を引こう(5)。

思婦引者、衛女之所作也。衛侯有賢女。邵王聞其賢、而請聘之。未至而王薨。太子曰、吾聞齊桓公得衛姬而霸。今衛女賢、欲留。大夫曰、不可。若女賢必不我聽、若聽必不賢。不可取也。太子遂留之。果不聽。拘於深宮、思婦不得。心悲憂傷、遂援琴而作歌曰、「涓涓泉水、流反於淇兮、有懷於衛、靡日不思、執節不移兮行不詭隨、坎坷何辜兮離厥舊」。曲終縊而死。

思婦引は、衛の女の作る所なり。衛侯に賢女有り。邵王其の賢なるを聞きて、之を聘らんことを請う。未だ至らずして王薨す。太子曰く、吾聞く齊の桓公は衛姫を得て霸たり。今 衛女は賢なり、留めんと欲すと。大夫曰く、不可なり。若し女賢ならば必ず我を聴さず、若し聴さば必ず賢ならず。取るべからざるなりと。太子 遂に之を留む。果たして聴さず。深宮に拘われ、帰るを思うも得ず。心は悲しみて憂傷し、遂に琴を援りて歌を作りて曰く、

涓涓泉水

涓涓たる泉水

流反於淇兮

流れて淇に反る

有懷於衛

衛を懐うこと有りて

靡日不思

日として思わざる靡し

執節不移兮行不詭隨 節を執りて移らず行いて詭隨せず  
坎珂何辜兮離厥菑 坎珂何の辜ありてか厥の菑に離る  
と。曲終わりて縊れて死す。

ここで、歌中の語句について簡単に見ておこう。歌の前半部は『詩経』邶風・泉水の第一章とほぼ同じものである。

崧彼泉水 崧たる彼の泉水は

亦流于淇 亦淇に流る

有懷于衛 衛を懷うこと有りて

靡日不思 日として思わざる靡し

嬖彼諸姬 嬖たる彼の諸姫と

聊与之謀 聊か与に謀らん

「泉水」の小序は、

泉水、衛女思婦也。嫁於諸侯、父母終。思婦寧而不得、故作是詩以自見也。

泉水は、衛の女 帰るを思うなり。諸侯に嫁して、父母終す。婦寧せんことを思うも得ず、故に是の詩を作りて以て自ら見すなり。

と説明する。衛から他国に嫁した女性が、父母の死を機会に里帰りを望んだものかなえられなかったことを詠じたものである、とみなすのである。「琴操」とは、衛の女性が主人公である点は共通するが、背景はかなり異なっている。「詭隨」は、みだりに人にしたがうこと。『詩経』大雅・民勞に、

無縱詭隨 詭り隨うを縱す無かれ

以謹無良 以て無良を謹め

とある。「坎珂」は、志を得ないこと。埒軻は、坎珂と同じ。『楚辞』七諫・怨世に、

年既已過太半兮 年 既已に太半を過ぎ

然埒軻而留滯 然も埒軻して留滯す

と言う。

この歌は、明・馮惟訥撰『古詩歸』卷四、古逸の項にも『琴苑要録』(6)を出典として収録される。ただし、若干の異同があり、第六句が変形されて増補され、一句多くなっている。

涓涓泉水 涓涓たる泉水

流及于淇兮 流れて淇に及ぶ

有懷于衛 衛を懷うこと有りて

靡日不思 日として思わざる靡し

執節不移兮行不嚮 節を執りて移らず行いて嚮らず

矜軻何辜兮離厥菑 矜軻 何の辜ありてか厥の菑に離る

嗟乎何辜兮離厥菑 嗟乎 何の辜ありてか厥の菑に離る

遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』漢詩卷十一は、琴曲歌辭を収録しており、『琴操』について次のように指摘する。

琴操、後漢蔡邕撰集。以平津館本為最善。……又今本琴操間有後人所增。如思婦引一歌、西晋初尚未流傳。故石崇序、此曲有絃無歌。今此歌辭明為後人所作。隋志云、琴操三卷、晋広陵相孔衍撰。挾此、旧本琴操累經增添可知也。

琴操は、後漢の蔡邕の撰集。平津館本を以て最善と為す。

……又 今本琴操は間に後人の増す所有り。思婦引の一歌の如きは、西晋の初め尚お未だ流傳せず。故に石崇の序に、此

の曲 絃有るも歌無しと。今の此の歌辞は明らかに後人の作る所為り。隋志に云う、琴操三卷、晋の広陵の相孔衍撰と。此れに拠れば、旧本琴操の累りに増添を經しこと知るべきなり。

また同書は、『古詩帰』と同じく『琴苑要録』を出典として「思帰引」を載せ、次のような案語を付している。

晋石崇思帰引序曰、崇少有大志、晩節更樂放逸、因覽樂篇有思帰引、古曲有絃無歌。乃作樂辞云云。又琴操此引亦有序無歌。拠此本篇顯係後人依託。

晋の石崇の思帰引の序に曰う、崇少くして大志有り、晩節には更に放逸を樂しみ、因りて樂篇を覽るに思帰引有り、古曲には絃有りて歌無し。乃ち樂辞を作る云々と。又琴操の此の引には亦序有りて歌無し。此れに拠れば本篇は顯らかに後人の依託に係る。

ここに言う石崇(二四九—三〇〇)の「思帰引序」は、『文選』卷四十五に見える。この序の制作動機に係わる部分と「思帰引」(『芸文類聚』卷四二、樂部二、樂府。『樂府詩集』卷五八)を引いておこう。

余少有大志、夸邁流俗。弱冠登朝、歷位二十五年。五十以事去官。晩節更樂放逸、篤好林藪、遂肥遁於河陽別業。……歎復見牽羈、婆娑於九列。困於人間煩黷、常思帰而永歎。尋覽樂篇、有思帰引。儻古人之情、有同於今。故制此曲。此曲有絃無歌。今為作歌辞、以述余懷。恨時無知音者、令造新声而播於糸竹也。

余少くして大志有り、夸りて流俗に邁る。弱冠にして朝に登り、位を歷ること二十五年。五十にして事を以て官を去る。晩節には更に放逸を樂しみ、篤く林藪を好み、遂に河陽の別業に肥遁す。……歎ち復た牽羈せられ、九列に婆娑たり。人間の煩黷に困し、常に帰らんことを思いて永歎す。尋いで樂篇を覽るに、思帰引有り。儻しくは古人の情、今に同じき有り。故に此の曲を制れるか。此の曲には絃有りて歌無し。今、為に歌辞を作り、以て余の懷いを述ぶ。恨むらくは時に知音の者の、新声を造りて糸竹に播さしむる無きを。

思帰引

思帰引

帰河陽

河陽に帰らん

仮余翼

余が翼を仮りて

鴻鶴高飛翔

鴻鶴は高く飛翔す

經芒阜

芒阜を經

濟河梁

河梁を濟り

望我旧館心悅康

我が旧館を望みて心は悅康す

清渠激

清渠は激し

魚彷徨

魚は彷徨す

雁驚泝波群相將

雁は驚き波を泝りて群れて相い將い

終日周覽樂無方

終日周覽して樂しみは方ぶる無し

登雲閣

雲閣に登り

列姬姜

姬姜を列ぬ

拊糸竹

糸竹を拊ち

叩宮商

宮商を叩く

宴華池 華池に宴し

酌玉觴 玉觴を酌む

この作品は、序の内容と対応して、官職の束縛から脱して河陽・金谷（河南省洛陽市の東北）の別荘に帰りたいという願望を詠じている。この「思婦引序」について、李善注は「琴操」を引いて、次のように言っている。

琴操、思婦者衛女之所作也。欲婦不得。心悲憂傷、援琴而歌、作思婦引。

琴操に、思婦は衛の女の作る所なりと。帰らんと欲して得ず。心は悲しみて憂傷し、琴を援りて歌い、思婦引を作る。李善の見た『琴操』に、「思婦引」の古辞とされる作品が載っていたかどうか、この記述のかぎりでは定かではないが、遠欽立の指摘のとおり、石崇が「思婦引序」を書き、「思婦引」の歌辞を作った西晋時期には、「思婦引」の古辞は伝わっていなかったことは確かである。また、梁の劉孝威（？—五四八）にも「思婦篇」（『芸文類聚』卷四二、樂部二、樂府。『樂府詩集』卷五八）があるが、これも漢代の故事に借りながら、「胡地」に遠征した兵士の、危急を救おうとする活躍ぶりとその帰郷の思いがかなえられないことを詠ずる内容になっている。

胡地憑良馬 胡地 良馬に憑る

懷驕負漢恩 驕を懷きて漢恩を負う

甘泉烽火入 甘泉 烽火入り

回中宮室燔 回中 宮室燔かる

錦車勞遠駕 錦車 遠駕を勞し

繡衣疲屨奔 繡衣 屨しば奔るに疲る

貳師已喪律 貳師 已に律を喪い

都尉亦銷魂 都尉も亦た銷魂す

龍堆求援急 龍堆 援けを求むること急に

孤塞請先屯 孤塞 先に屯せんことを請う

櫪下嚴双駿 櫪下に双駿を嚴め

腰辺帶兩鞬 腰辺に兩鞬を帯ぶ

乘嶂無期限 嶂に乘じて期限無し

思婦安可言 帰るを思うも安くんぞ言うべけん

この劉孝威の「思婦篇」については、すでに『樂府詩集』卷五十八が、『樂府解題』を引いて次のように指摘している。

一作離拘操。琴操曰、……。晋石崇思婦引序曰、……。但思婦河陽別業、与琴操異也。樂府解題曰、若梁劉孝威胡地憑良馬、備言思婦之情而已。按謝希逸琴論曰、箕子作離拘操。不言衛女作、未知孰是。

一に離拘操に作る。琴操に曰く、……。晋の石崇の思婦引の序に曰く、……と。但だ河陽の別業に帰らんことを思うは、琴操と異なるなり。樂府解題に曰く、梁の劉孝威の胡地憑良馬に憑るの若きは、備さに思婦の情を言うのみ。按ずるに謝希逸の琴論(8)に曰く、箕子は離拘操を作ると。衛女の作と言わず、未だ孰れか是なるを知らず。

#### 四

こうしてみると西晋時期ばかりでなく、梁代にも「思婦引」

の成立にまつわる逸話は伝えられていたものの、古辞とされる作品は見られなかった、もしくは制作されていなかったと考えることが妥当である。従って、現在見得る作品は六朝以降、『琴操』が増補されていく期間に制作されたものと言って良いのではなからうか。ちなみに、あまり注意されないが、元稹（七七九—八三二）が、憲宗の元和十二年（八一七）に書いた「樂府古題序」（『元氏長慶集』卷二三）は、次のように「思婦引」に言及している。

劉補闕云、樂府肇於漢魏。按仲尼学文王操、……衛女作思婦引、則不於漢魏而後始亦以明矣。

劉補闕（9）云う、樂府は漢魏に肇（はじ）まると。按ずるに仲尼は文王操を学び、……衛女は思婦引を作る、則ち漢魏に於いてせずして後に始まること亦以て明らかなり。

史成編『全唐詩索引』（上海古籍出版社、一九九〇）によれば、「思婦引」と題する作品は四篇が残されている。まず、張祐（？—八三〇？）の作品を見よう。この作品は『樂府詩集』卷五十八にも収録される。

重重作閨清且鏞 重重 閨を作り清らかにして且つ 鏞あり  
兩耳深聲長不徹 兩耳 深聲長に徹かず  
深宮坐愁百年身 深宮 坐ろに愁う百年の身  
一片玉中生憤血 一片の玉中 憤血を生じ  
焦桐罷彈絲自絕 焦桐 弾くを罷めて絲 自ずから絶ゆ  
漠漠暗魂愁夜月 漠漠たる暗魂 夜月に愁う

故郷不歸誰共穴 故郷 歸らずんば誰と 穴を共にせん  
石上作蒲蒲九節 石上 蒲蒲の九節を作せ

「九節蒲」は、漢の武帝が嵩山で得たという九つの節のある仙草の名。菖蒲の一種。また、葛洪『抱朴子』仙藥卷十一に、

菖蒲生須得石上、一寸九節已上、紫花者尤善也。

菖蒲 生ずれば須く石上に得べし、一寸九節已上、紫花なる者 尤も善きなり。

と言う。末句は、仙藥を得て、故郷に歸る日の来るまで長寿を保ちたいというのであろう。この作品には『琴操』に見られた背景、つまり深宮に閉じこめられた不幸な女性の悲哀がうかがわれるが、死を目前にした緊迫感は見られない。次に引く于瀆（八三二—？）の作品（10）には、自身の不遇感と望郷の念が述べられていて、『琴操』の逸話とはまったく関係しない。

不耕南畝田 南畝の田を耕さず

為愛東堂桂 為に東堂の桂を愛す

身同樹上花 身は樹上の花に同じく

一落又經歲 一たび落ちて又 歳を経たり

交親日相薄 交親は日に相い薄んじ

知己恩潛替 知己は恩 潛かに替る

日開十二門 日に開く十二門

自是無歸計 自ずからは歸計無し

「潛替」は、心変わりして冷淡にするさまであろう。「十二門」は、宮城の周囲にある十二の門。韋莊（八三六—九〇八）の作品も、旅にある者の望郷の念を言うものであって、『琴操』の

逸話とは関係がない。

越鳥南翔雁北飛 越鳥は南に翔り雁は北に飛ぶ

兩郷雲路各言歸 兩郷の雲路 各おの言に帰る

如何我是飄飄者 如何せん我は是れ飄飄たる者

獨向江頭恋釣磯 独り江頭に向つて釣磯を恋う

于瀆と韋莊は、「思婦引」の題名を用いるときに、『琴操』所

載の故事の存在をまったく意識していないのである。

これらとは別に、劉禹錫（七七二—八四二）には「聞道士彈

思婦引」と題する七絶があつて、次のように詠じられる<sup>(1)</sup>。

仙翁一奏思婦引 仙翁 一えに思婦引を奏で

逐客初聞自泫然 逐客 初めて聞きて自ずから泫然たり

莫怪殷勤悲此曲 怪しむ莫かれ殷勤に此の曲を悲しむを

越声長苦已三年 越声 長に苦しむこと已に三年

瞿蛻園『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社、一九八九）は、

この詩について、

按、此詩有越声長苦已三年之句、当是元和三年在朗州作。

按ずるに、此の詩に越声 長に苦しむこと已に三年の句有

り、当に是れ元和三年（八〇八）朗州（湖南省常德市）に在

りしときの作なるべし。

と言う。連州（広東省連県）へ左遷される途次に任地を改められ、

朗州司馬として左遷されていた劉禹錫は、「思婦引」を耳にし

てさらに望郷の思いをかきたてられたのである。

## 五

さて、これまで見てきたとおり、『選析』が「絶命歌」と題

するのは根拠が不明であり、あえて収録するにしても、せめて

「思婦引」と題するのが適切であつただろう。ただし、この作

品も少なくとも梁代まではその存在が認められない。唐代の同

題の作品を残している詩人においても、晩唐の張祜の作品には

宮女の憂愁を詠ずるという点でわずかに『琴操』の投影が見ら

れたが、彼の作品とても、死を前にした緊迫感とは無縁のもの

であつた。したがつて『選析』が、「絶命歌」として引く作品は、

先述したように、『琴操』が増補される過程において、何者か

が『詩経』と結びつけて創作した作品であるとみなしてよから

う。何よりも郭茂倩の『樂府詩集』がこれを収録しないことが、

そのことを雄弁に物語つていえると言えらる。この作品は、

あるいは臆断にすぎないかも知れないが、宋代、『樂府詩集』の

編纂以後に創作されたものとも考えられるのである。

（一九九九・三・九）

### 注

1 「北海道教育大学紀要」一部A 三〇巻二号。

2 『鎌田正博士八十寿記念漢文学論集』大修館書店、一九九

一。その後、注1の拙稿とともに、拙著『中国中世の哀傷文

学』研文出版、一九九八に収録。

3 『歴代絶命詩選析』（以下、『選析』と略称する）は、出

典を記さない。

4 王維には、二〇歳の時の作である、次のような五絶「息夫

人」(『河岳英靈集』卷上は「息夫人怨」に、『国秀集』卷中は「息嬀怨」に作る)がある。

莫以今時寵 今時の寵を以て

能忘旧日恩 能く旧日の恩を忘るる莫からんや

看花滿眼淚 花を看着滿眼に涙し

不共楚王言 楚王と共に言わす

陳鉄民『王維集校注』(中華書局、一九九七)によれば、

この作品は、睿宗の子の寧王李憲が「餅」を売る者の妻を取り上げたことを、息夫人の、節を屈してまで楚王には仕えまいとする決意を借りて風刺する作品とされる。王維にとって「大車」は『列女伝』と結びついていたのであろう。

5 この文章は、『風雅逸篇』卷二所載のものほとんど変わらないが、歌辞には次のように若干の異同がある。

涓涓淇水

流于淇兮

有懷于衛

靡日不思

涓涓たる泉水

流れて淇に及ぶ

衛を懐うこと有りて

日として思わざる靡し

執節不移兮行不詭隨

坎珂何辜兮離厥茨

また、この文章は『太平御覽』卷五七八にも、『樂府解題』

を出典として次のように引かれており、一部異同がある。

思婦引。衛有賢女。劭王聞其賢請聘之。未至而王薨。太子曰、吾聞齊桓得衛姬霸。今衛女賢者、欲留之。大夫曰、不可。若賢必不我聽、聽亦不賢。不足取。太子不聽、遂留拘深宮。思

婦不得婦、援琴而歌、曲終自縊而死。

6 『琴苑要録』については未詳。なお、『古詩紀』は注4に引いた歌も併せて載せる。

7 孔衍(二六八―三二〇)、字は舒元は、孔子三二世の孫。

『晋書』卷九一、儒林伝に、「凡所撰述、百余万言。」(凡て撰述する所、百余万言。)と言う。

8 王昆吾『隋唐五代燕楽雜言歌辞研究』(中華書局、一九九六)は、この『琴論』について次のように言う。

『樂府詩集』引文云謝希逸撰。『宋史・藝文志』、『中興書目』著録。『樂府詩集』以前、未見著録与徵引、応是唐五代人所撰(參劉大傑「再談胡笳十八拍」、『文学評論』一九五九年四期)。

9 劉補闕は、劉餗のこと。右補闕、集賢殿學士となり、『樂府古題解』一卷を著した(『旧唐書』卷一〇二)。

10 『全唐詩』は、「一に羅隱詩に作る」と言う。

11 この作品について、増田清秀『樂府の歴史的研究』(創文社、一九七五)第十四章 隋唐における古曲の演奏、三六九頁は、「盛唐及びそれ以後に演奏されていたものに、『風入松』『易水』『思婦引』『三樂』『瀟湘送神曲』があり、…劉禹錫の『聞道士彈思婦引』…の詩が証明している。」と指摘する。ただし、当時「思婦引」が演奏されていたことは事実であっても、その内容は、望郷の念をかきたてるものであったという以外、不明であると言いか言いようがない。